

豊島区コミュニティ・スクール事業検討委員アンケート結果（概要）

1. CSの目指すべき姿

- ・ CSは学校と地域が対等
- ・ 学校は子どもたちのためだけではなく、地域の人たちが自分を向上させるために活用できる
- ・ 学校が持つ役割を学校・地域の安心安全、生涯学習、生きがいつくりの場として地域に愛される施設に
- ・ コーディネーターの発掘や学校地域の連携を一層高めること、交流できる場を設けることなど、CSをうまく活用して意見交換ができるようにしなければならない
- ・ 5年先、10年先を見据えた学校と地域の関係性及び本区の教育のバリューを構築していくことがCS制度を導入する意味
- ・ 今、学校で何を学ばなければならないのか。教師、子ども、親、地域、政治家、経営者、官僚と一緒に未来のために力を合わせて課題に取り組んでいかなければならない
- ・ 子どもたちは地域で育てるという大前提のもと、各部署、団体がそれぞれ対応し、問題等を共有しながら一つのコミュニティを進められれば良い
- ・ 大人と出会う機会を重ね、たくさんの体験をしながら、社会に貢献できる人として成長してもらいたい

2. 地域と学校の関係

- ・ 先生方と地域団体との情報の共有
- ・ 学校、PTA、地域の関係性を保つ仕組み
- ・ 学校と地域との連携を強化し、地域行事への児童の参加、学校行事への地域住民の参加を働きかけ、関係を深める
- ・ これからは学校から発信し、地域に関わることで、地域が学校を身近に感じることができるようになる
- ・ 中学校では地域との交流やイベント参加は現状難しい。どのようにしたら生徒、保護者が参加しやすくなるか
- ・ 子どもたちにとっては教師の声がけが大事。特に部活の先生の役割が非常に重要
- ・ 学校にとっては新たな取組に時間がかかり、かなりの負担になる

3. CS 導入により期待される効果

(1) 学校

- ・教育活動の支援（負担軽減・教育活動の増加）を受けられる
- ・校外活動時の安全が確保できる
- ・地域理解、区政理解、社会貢献意識の醸成、子どもへの理解の深まり、地域に根差した学校経営
- ・地域の人材をゲストティーチャーとして迎え入れ、児童・生徒またその保護者となつながらコミュニケーション豊かな環境を醸成できる
- ・学校保健会の内容を加えることで、児童の健康面への助言を定期的に聞ける
- ・公立学校にしかできない、地域に根差した学校経営
- ・部活動の指導としてメリットがあり、働き方改革につながる
- ・コロナ禍でも実現できる授業の選択が広がる
- ・区全体として教育の質を良質かつ持続可能とすることができる

(2) 地域

- ・防災や地域活性化
- ・学校教育活動の理解、子どもの理解促進、交流機会の増加、地域行事の活性化
- ・児童と地域住民がお互いの顔が分かる関係が築ける
- ・学童、児童と触れ合う機会がない世代の人との交流が生まれる
- ・子どもたちは生まれ育った地域が本当の故郷となり、次代に繋げ、町の発展にもつながる
- ・将来の地域の担い手を育てることができる
- ・地域活性化が進み、人同士のあいさつ・会話を生み、地域に顔見知りが増える

(3) 家庭

- ・多様な人とのかかわりや様々な体験活動等を通して、子どもの学びを深めることができる
- ・児童と地域住民がお互いの顔が分かる関係が築ける
- ・地域理解、地域愛、地域行事参画意識、地域貢献意識の向上、地域交流機会の定着・増加
- ・ふるさとを作ることができる

(4) 人事

- ・教職員の任用について必要な意見を具申することで、学校の教育活動を一層充実させることができる
- ・公募による教員は、豊島区の CS 校での勤務にあたって、地域貢献に努めることを明確にうたっていくことが必要

4. 学校運営協議会の運営

(1) 組織体制

- ・既存の学校運営連絡協議会の組織を生かす
- ・実働部隊が必要
- ・学校保健会の内容も加える
- ・組織が大きくなりすぎると運営が課題

(2) 委員の選定

- ・児童に関わっている方を委員にすべき
- ・地域で中核となる人材に声をかける
- ・校長推薦と委員長推薦をバランスよく
- ・新たにメンバーを募る
- ・教員や児童も入れると良い
- ・しごらみがある中で人選を行う難しさがある

(3) 熟議、PDCA サイクル

- ・児童目線での議論
- ・「自分たちができる範囲」でお手伝いをするために何が必要かを議論するのが最も大事
- ・地域の人材を大いに活用して、それぞれの課題を明確にし、誰がその課題に関わって、どう解決に結びつけるか決める
- ・それぞれの役割を明確にし、学運協から発信することで、協働体制が強固になり、経営方針の実現ができる
- ・学校の応援として、それぞれが何をどれだけやるのか、安全に効率的にどういう順序で進めていくか決める必要
- ・年間行事や児童の様子のプリントは事前に配り、当日はメンバーがテーマごとに議論をし、問題提起しながら解決方法まで話し合いをするのがベスト
- ・保護者、地域も協力する形で解決方法まで提案をし、取組の検証ができれば、毎年の議論が簡潔になっていく
- ・問題提起まではよく出るが、解決方法は学校側に丸投げや要望で終わり、検証もされていない

(4) その他

- ・議事録やCSだよりの作成等の分担を明確に
- ・個人情報等の管理方法のルール化
- ・予算や備品、活動場所の確保
- ・予算は寄付やクラウドファンディングなどを活用する方法も検討する
- ・活動の周知方法
- ・PTAの役割明確化

5. 地域学校協働活動（学校支援・地域貢献）

- ・多数の主体（団体）が多様な活動を実施しており、それらの整理が必要
- ・人材や地域資源を発掘し、協力員を増やす
- ・コーディネーターの人材育成、負担軽減
- ・校外活動時の安全確保
- ・財政的な付与
- ・中学校で放課後カフェの時間を作り、日ごろ話せない生徒と話すチャンスを作れたらよい
- ・コーディネーターと地域へのアナウンス方法の構築
- ・個人情報の管理のルール化

6. インターナショナルセーフスクール（ISS）とCSの関係

- ・一本化することへの期待は大きい
- ・重複する議題も多く、分ける必要がない
- ・一本化することで運営しやすくなる
- ・各種委員会のメンバーがほとんど同じなので、時間をもったいない
- ・ISSとCSをどう整合させるのか
- ・セーフコミュニティの一つとして、豊島区型のCSを推進すべき
- ・地域対策委員会の委員から意見を聞く必要
- ・地域の力をCSに統合
- ・CSの活動も子どもたちの委員会活動を通して行い、かつその活動がISSでも認められるなら良い
- ・内容が異なるため、会議を一つにして減らすことは難しい
- ・地域対策委員会は幅広い関係者が参加する貴重なメンバー。幅広い地域連携をなくすことは難しい
- ・過剰な負担を強いたり、プラットフォーム化してしまうと、学校がかえって機能不全に陥る危険性